

授業で使える当館所蔵地図

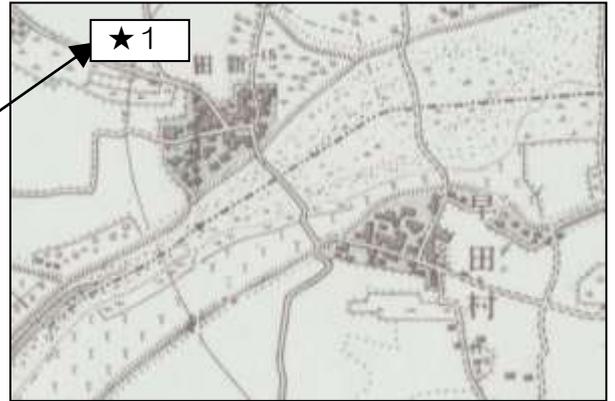
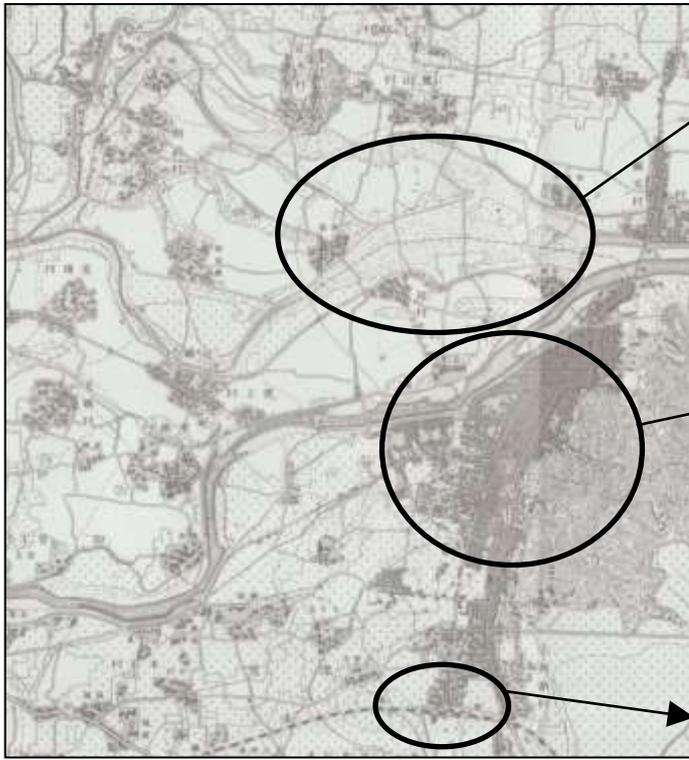
No. 69 地図1：『地図で見る岐阜の変遷Ⅰ』、地図2：『地図で見る岐阜の変遷Ⅴ』

作成年 地図1：1891（明治24）年、地図2：1994（平成6）年

サイズ 地図1・2：54×78cm

作者 地図1・2：（一財）日本地図センター

地図1



【解説】

明治24年[地図1]と平成7年[地図2]の岐阜市中心部の地図である。岐阜市中心部の市街地の拡大、長良川の治水や河道域とその土地利用、現在の地名との比較をすることができる。また、同じ地域の昭和45年の地図など、複数の年代における地図を用いることで、現代の身の回りの風景との比較をしながら、国道やトンネル、公共施設、団地の建設や治水等がどの段階で行われるのか探究できる。またそれらの施設や事業に対する需要の高まりやその背景について考察することができる。

★1 早田村付近の河道（古川・古々川）と当時の土地利用

かつて長良川から伊自良川へ向けて流れた河道（古川・古々川）が明治24年の地図では確認できる。河道であるため住居は見当たらない。また比較的堆積された砂礫が荒く水はけがよいことが考えられ、地図記号からも水田ではなく桑畑が広がり、養蚕や繊維産業が盛んな地域としての特徴を読み取ることができる部分である。

★2 岐阜市中心部

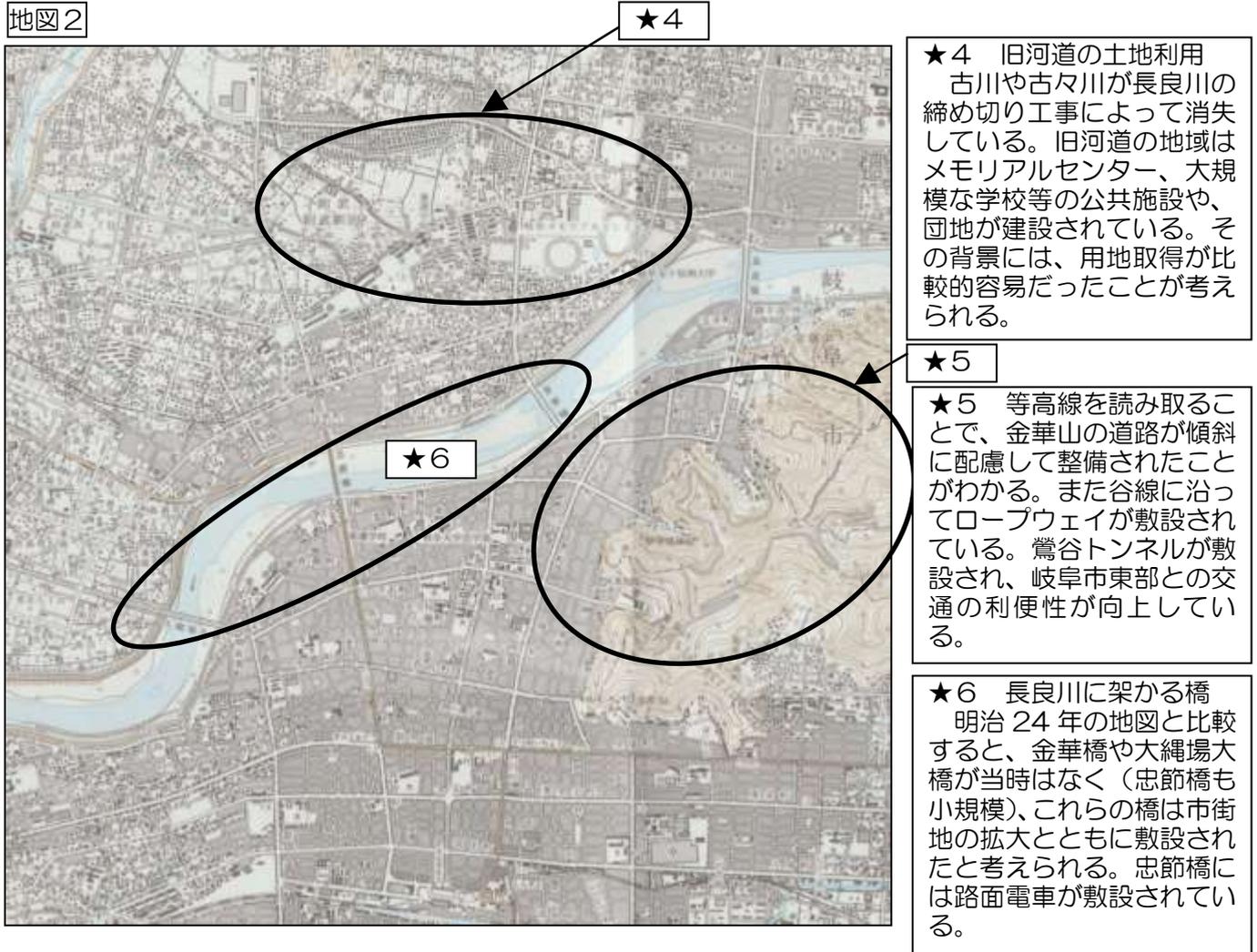
明治24年の地形図を見て、当時の市街地の広がり把握することができる。現在の長良橋通りを中心に市街地が広がり、市役所や官公庁も記されている。この地域から西方に市街地は広がっておらず、桑畑や水田が広がっていることを読み取ることができる。また、伊奈波神社の南、東別院から東へ向かうトンネルや鶯谷高等学校は、まだ存在していない。

★3 岐阜駅周辺

JRの線路の配置は現在のものとほぼ同じであるが、明治24年の岐阜駅周辺部の市街地の分布はかなり小規模のものだということが読み取れる。岐阜駅周辺は高校生にとってもなじみ深く、授業で比較しやすい地域だと考えられる。
※岐阜駅の位置も若干変化していることが分かる。



地図2



【利用の例】

○明治24年と現在との長良川の河道域の変化を探究することができる。

- 現在では消失している河道域について、桑畑に利用されていた。
- 長良川の締め切り工事に伴い、消失した河道に大型の公共施設が敷設されている
- 高度経済成長期には、紡績工場が立地し、その跡地が大型商業施設となっている。
- かつて集落が立地していた土地よりも、用地取得が容易だったことが考えられる。

○新旧地図を比較することで、現在に残る地名の歴史を追うことができる。

- 明治24年の地図上の各村落の名称が、現在の地名に数多く残っている。
- 「島」という字が付く地名が多い → 長良川の氾濫原であることが由来だと考えられる。

○教科書で学ぶ知識と、岐阜扇状地の構造と実際の土地利用とを確認しながら学習できる。

- 扇状地の扇央では水田は少なく果樹が多い → 明治24年当時から水田は少なかった
- 長良川の河道域から離れた後背湿地では水田が多く、住宅が少ない
- 明治24年当時から後背湿地には水田が多く住宅が少なかった（岐阜市東部）

○各地図と現在の岐阜市とを比較し、モータリゼーションの進展を理解することができる。

- 明治24年から平成7年にかけて名鉄や路面電車など鉄道が多く敷設されている。
- 平成7年の地図から、現在は見られない駅も多く存在していたことがわかる。
- 市街地の拡大とともに道路網も拡大されている。
- 駅のない地域に大規模な団地やロードサイド型の大型商業施設が建設されている。

（『地図で見る岐阜の変遷Ⅳ 昭和45年』や、現在の岐阜市の地形図も併用するとより深く考察できる）